

日本台湾学会報

第九号

目 次

論 説	
二つの正月——植民地台湾における時間の重層と交錯 (1895-1930年)	顔 杏 如 (1)
植民地体制における「文明」の両義性	許 時 嘉 (23)
——『台湾協会会報』の二言語使用の明暗構造への分析を通して	
1920年代台湾における地方有力者の政治参加の一形態	藤井 康子 (45)
——嘉義街における日台人の協力関係に着目して	
洪元煌の抗日思想——ある「台湾青年」の活動と漢詩	陳 文 松 (67)
故宮博物院をめぐる戦後の兩岸対立 (1949-1966年)	家永 真幸 (93)
台湾の外交関係断絶国との実務関係	竹茂 敦 (115)
——1950年初頭の英国との例を中心に	
民進党政権の「人権外交」——逆境の中でのソフトパワー外交の試み	佐藤 和美 (131)
「客人」から客家へ——エスニック・アイデンティティの形成と変容	田上 智宜 (155)
現代台湾社会運動の「成功」と変容	星 純子 (177)
——高雄県美濃鎮におけるダム建設反対運動とまちづくり	
現代台湾の多文化主義と先住権の行方	石垣 直 (197)
——〈原住民族〉による土地をめぐる権利回復運動の事例から	
台湾の介護サービスとホームヘルパー	陳 真 鳴 (217)
在台日本人の郷土主義 ^{レジヨナリスム} ——島田謹二と西川満の目指したもの	橋本 恭子 (231)
研究ノート	
日本統治期台湾における楊雲萍の詩	唐 顯 芸 (253)
——白話詩と日本語詩集『山河』を中心に	
書 評	
五十嵐真子・三尾裕子編	若林 正文 (265)
『戦後台湾における〈日本〉 植民地経験の連続・変貌・利用』	
講 演	
戦後台湾における台湾研究について——台湾史研究を中心として	張 勝 彦 (269)
	(翻訳 張 士 陽)

2007年5月

日本台湾学会